

10年後、  
教員(研究者)・学生・大学にとって  
大学図書館とは

土屋俊(千葉大学)

# 個人的懐古

- REFORM(2004-2006), REFORM2(2007-2007)
- 「ずいぶん変わったものだ」
  - 人が減った、本が減った、
- 背景
  - 1998年、千葉大学附属図書館長、秋から国公立大学図書館協力委員会委員長館、冬には電子ジャーナルシンポジウム(関東・東京地区国立大学図書館)⇒図書館情報学というのは使えない、なによりも人がいない
  - 2000年、電子ジャーナルコンソーシアム交渉開始
  - 2002年、機関リポジトリ構築への胎動
  - やっぱ使えない ⇒ 自分でやるしかない
  - 2002年任期満了 ⇒ 科研へ
- すべての学問の目的と意義:(現場)事実から出発して、抽象化、理論化、そして、再生
- 狙い
  - 大学図書館学の構築
  - 人材の養成
  - 現実への応用 ⇒ 現実が先行してしまった

# 結論は単純

- 2010年においては、大学図書館の研究支援機能は失われているだろう
  - なぜならば、インターネットがあり、ウェブがある
  - その前に、資料保存の機能は一定の効率化を経ているだろう
  - せいぜい、機関リポジトリ運営があるかもしれないが、機関リポジトリって「図書館」か？
- 教育支援機能も失われているだろう
  - なぜなら、教員は図書館の教育支援機能を使うのが下手だから(FDといえは「授業」改善という傾向を見よ)
  - 残るのは、何か。
- 教育機能のみである。
  - (さあ、そのための準備をしよう、してください)

# 大学図書館を制約する条件

- 研究支援機能を制約する条件
  - 学術情報流通の構造⇒電子ジャーナル・機関リポジトリ
  - 研究活動とその評価⇒論文業績中心主義
- 教育支援機能を制約する条件
  - 学術情報流通の構造⇒日本語出版の将来
  - 大学教育の実施方法⇒教室・eLearning ( distant, mobile )
- 大学そのものを制約する社会の変化
  - インターネット社会、知識基盤社会の進展
  - 大学教育の理念⇒「自立した問題解決能力」

# 学術情報流通の動向と研究支援機能の将来

1. 外国出版社刊行雑誌掲載論文へのアクセス環境は電子ジャーナル化により格段に改善 ⇐ NACSIS-ILLの分析
2. 国内学会刊行雑誌掲載へのアクセス環境は電子化により改善の途上 ⇐ NACSIS-ILLの分析
3. (周知の事実として)現物貸借は需要の10%
4. NACSIS-CAT/ILLによる資源共有は、対等共同の図書館間協力を非ず ⇐ NACSIS-CATの分析
5. 外国図書の図書館による購入は減っている ⇐ NACSIS-CATの分析
6. 国内には有力な国際雑誌刊行主体は存在しない
7. 外国出版者における図書の電子ブック化は進展しつつある
8. 国内出版者による電子的情報提供は絶望的である
  1. 所詮、CiNii、メディカルオンライン、J-STAGE、NDL電子化事業

# NACISIS-CAT/ILL研究

- 交渉の基礎は定量的データ
  - 「著作権」⇄国公私、「複写権センター」交渉
  - 100万件のデータ
  - 外国出版社との価格交渉
  - 3億円の動き、300億円の外国雑誌支出
- データがあるならば調べてみよう
  - 初期の研究(NACISISによる)以外はほとんどなかった
  - まずは、データの処理の環境整備
    - AN/AA問題
    - RDBの時代

# 何がわかったのか

- 日本の大学図書館間ILLはすばらしい
  - 80%以上を詳細に捕捉⇒残る部分は？⇒医療関係の不可解さ
  - 効率的、経済的、迅速
  - しかし、利用は2000年以降「停滞」？
- 雑誌の和洋分類
  - 「洋雑誌減、和雑誌増」の事実
  - その意味は？
- 千葉大亥鼻分館での発見 ⇒ 看護系への着目

# ILL依頼の和洋雑誌別変化

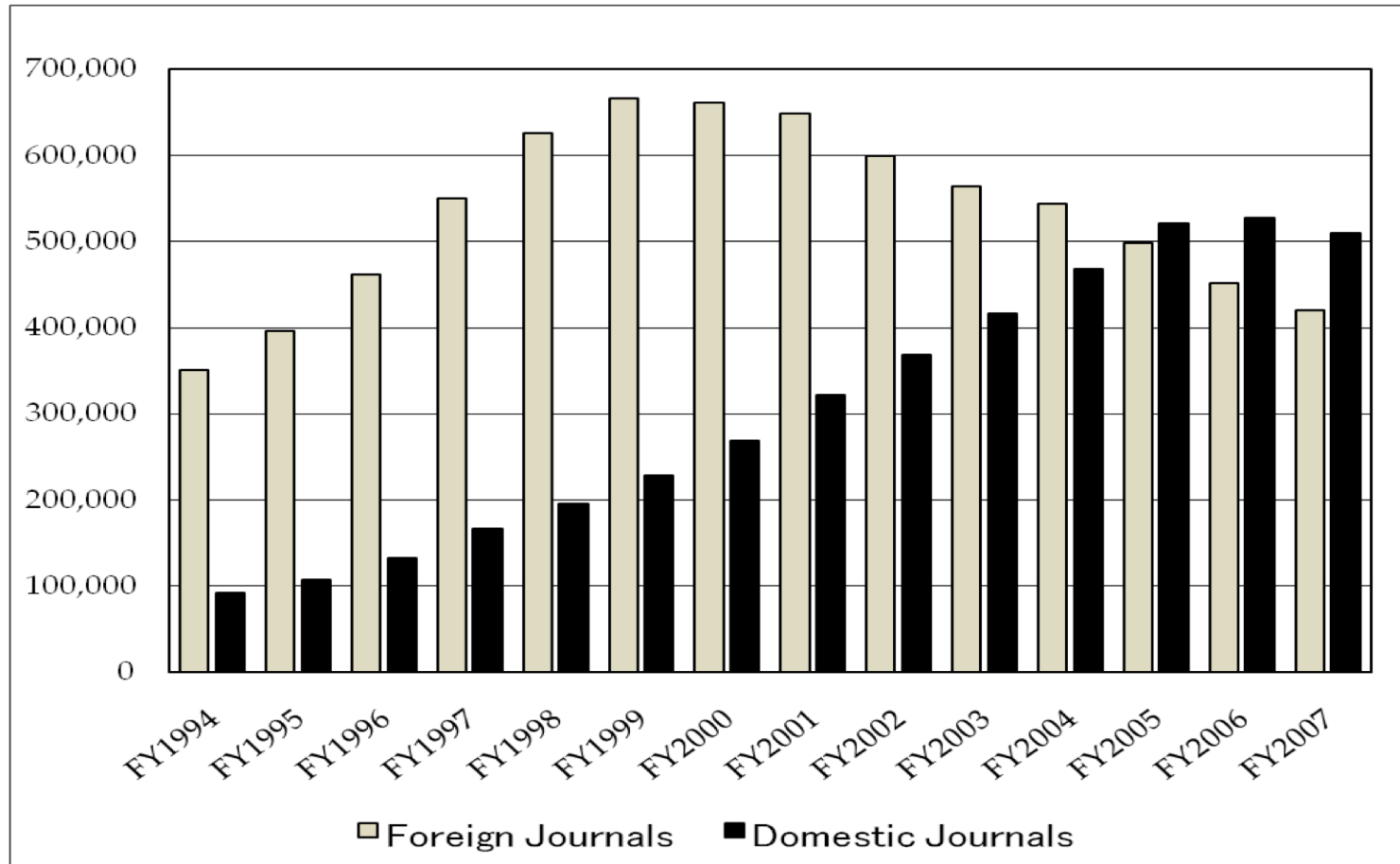


Figure 4. Changes in Number of Filled Requests for Foreign and Domestic Journals between FY1994 and FY2007.

# Elsevierタイトルの依頼数の減少

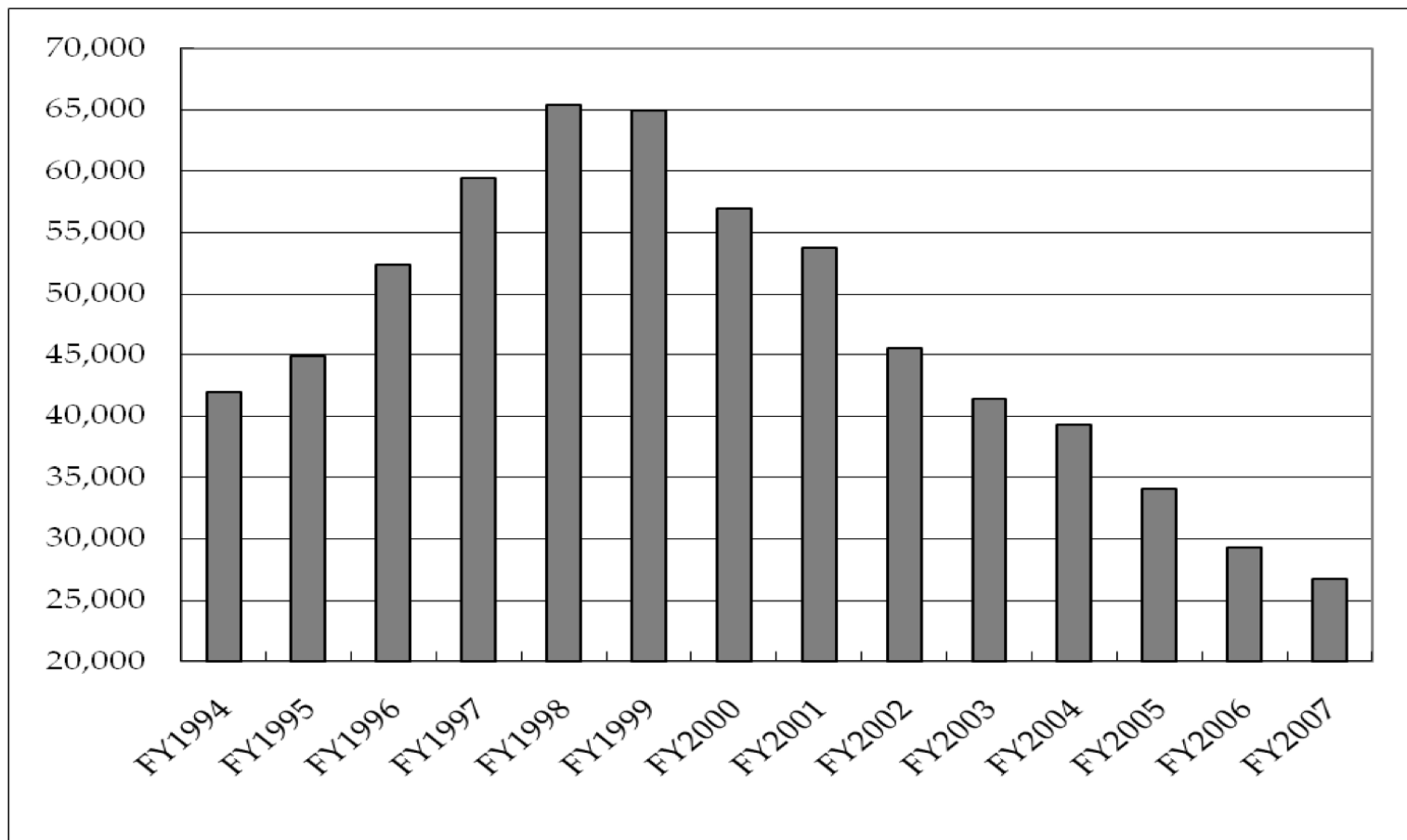


Figure 5. Change in Number of Filled Requests to Elsevier's 149 Journal Titles.

# 大学種別による減少のパターン

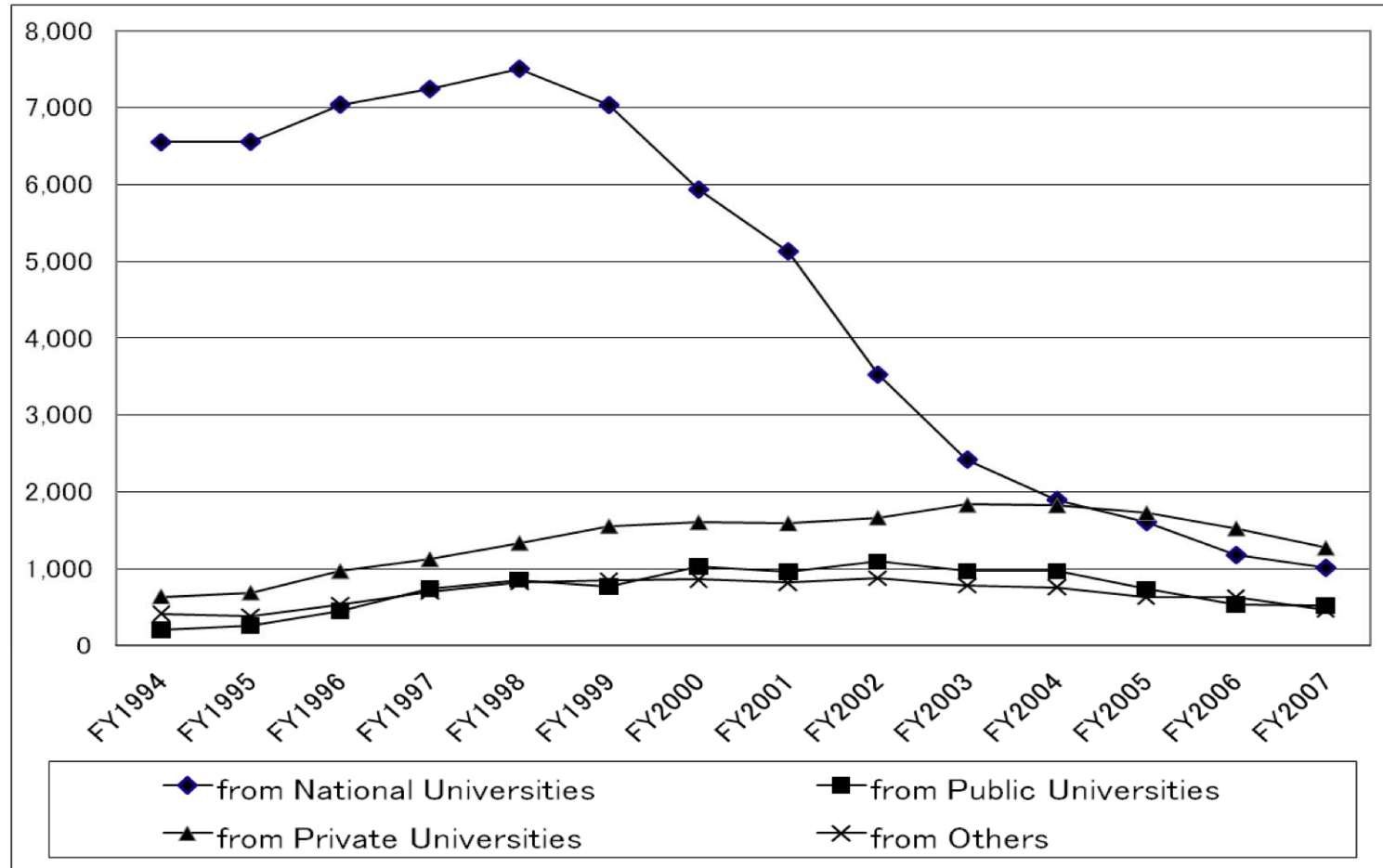


Figure 6. Change in Number of Filled Requests to Elsevier's Top 10 Journal Titles by Institution Type.

# CiNii契約形態別の減少パターン

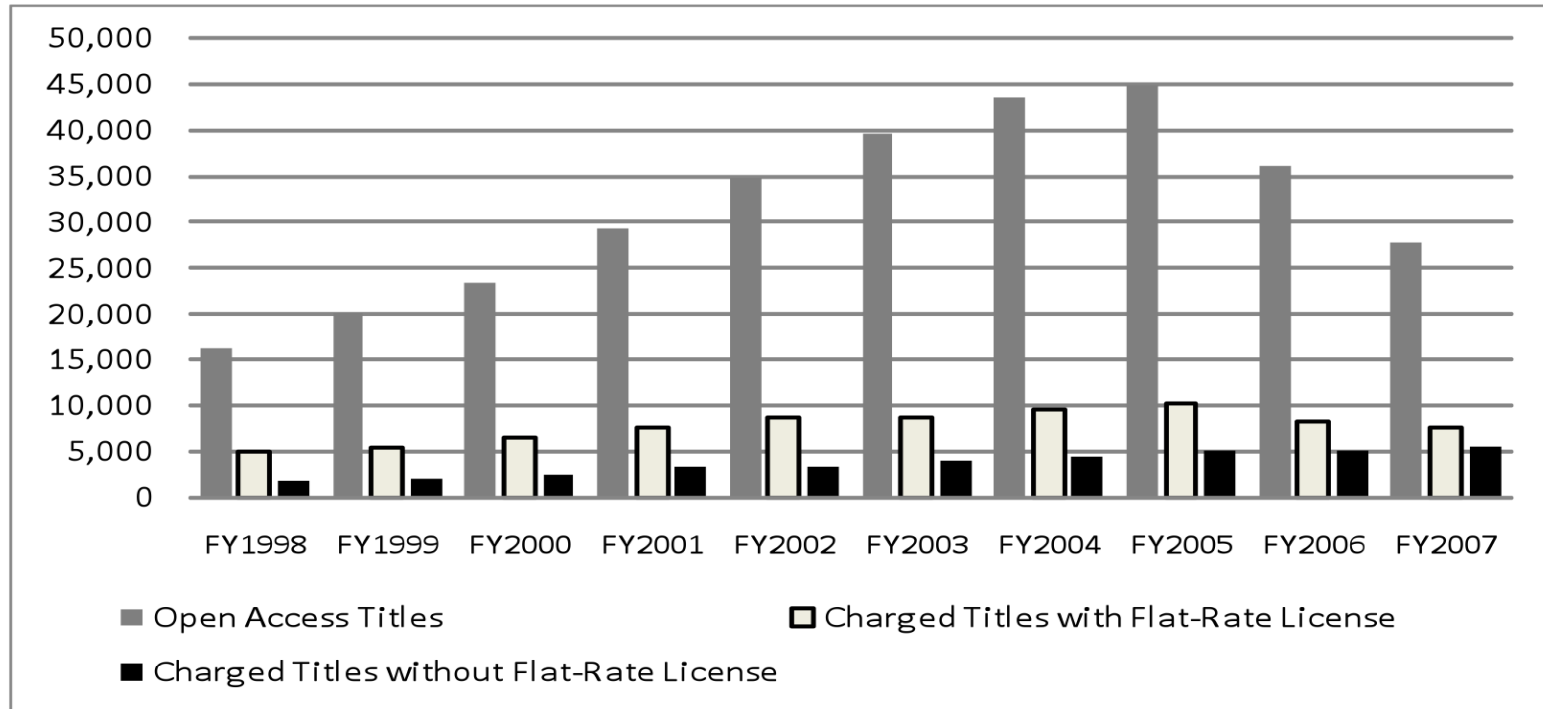


Figure 7. Change in Number of Filled Requests to Titles in “CiNii” by Category for Burden of Expense.

Note : It should be noted that the reason why the photocopy of articles in open access titles are still requested. The digitization of back issues of these journals is not completed or current issues of these journals published within a few years are being embargoed.

# メディカルオンライン掲載タイトルのILL 依頼の減少パターン

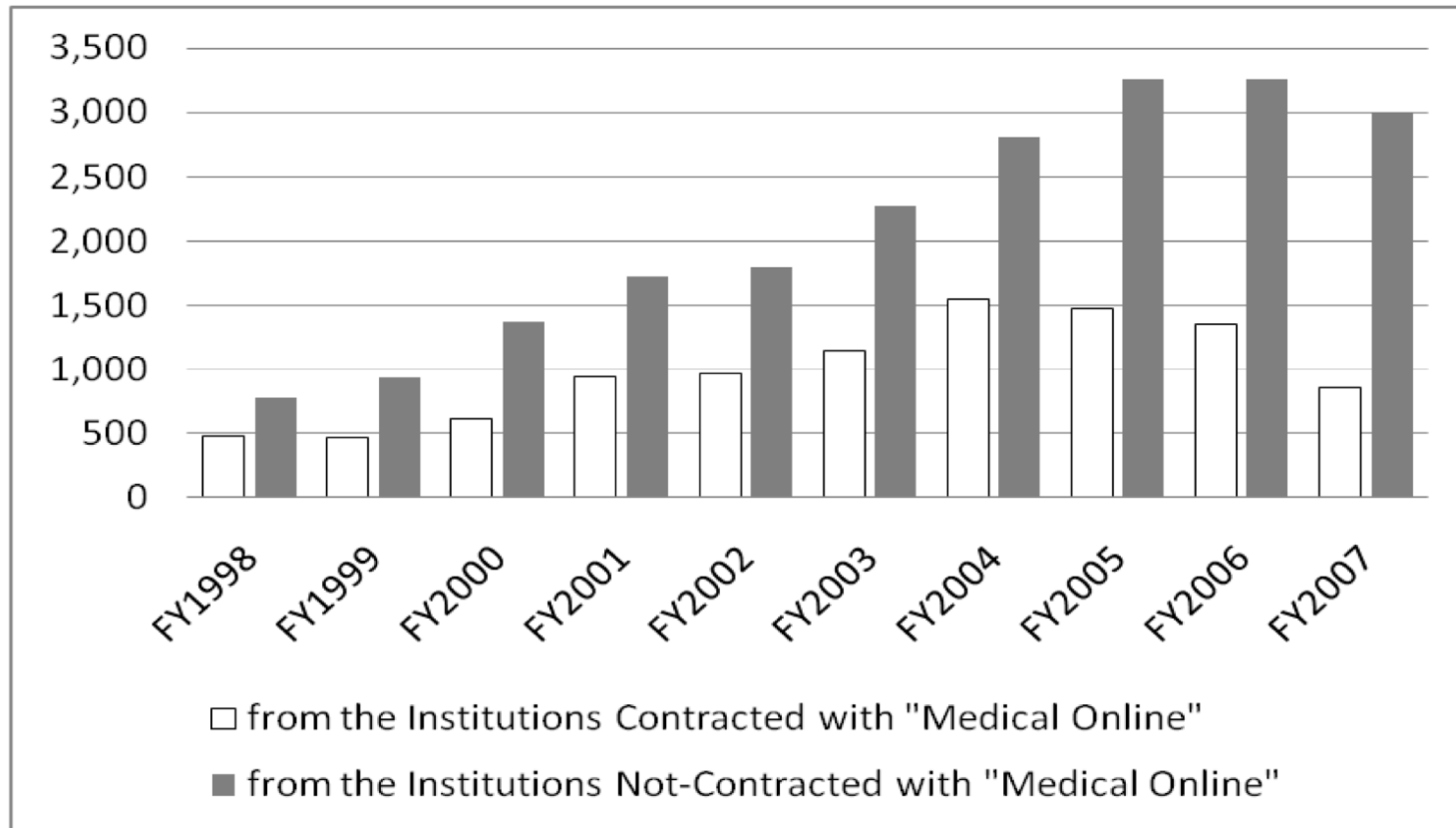
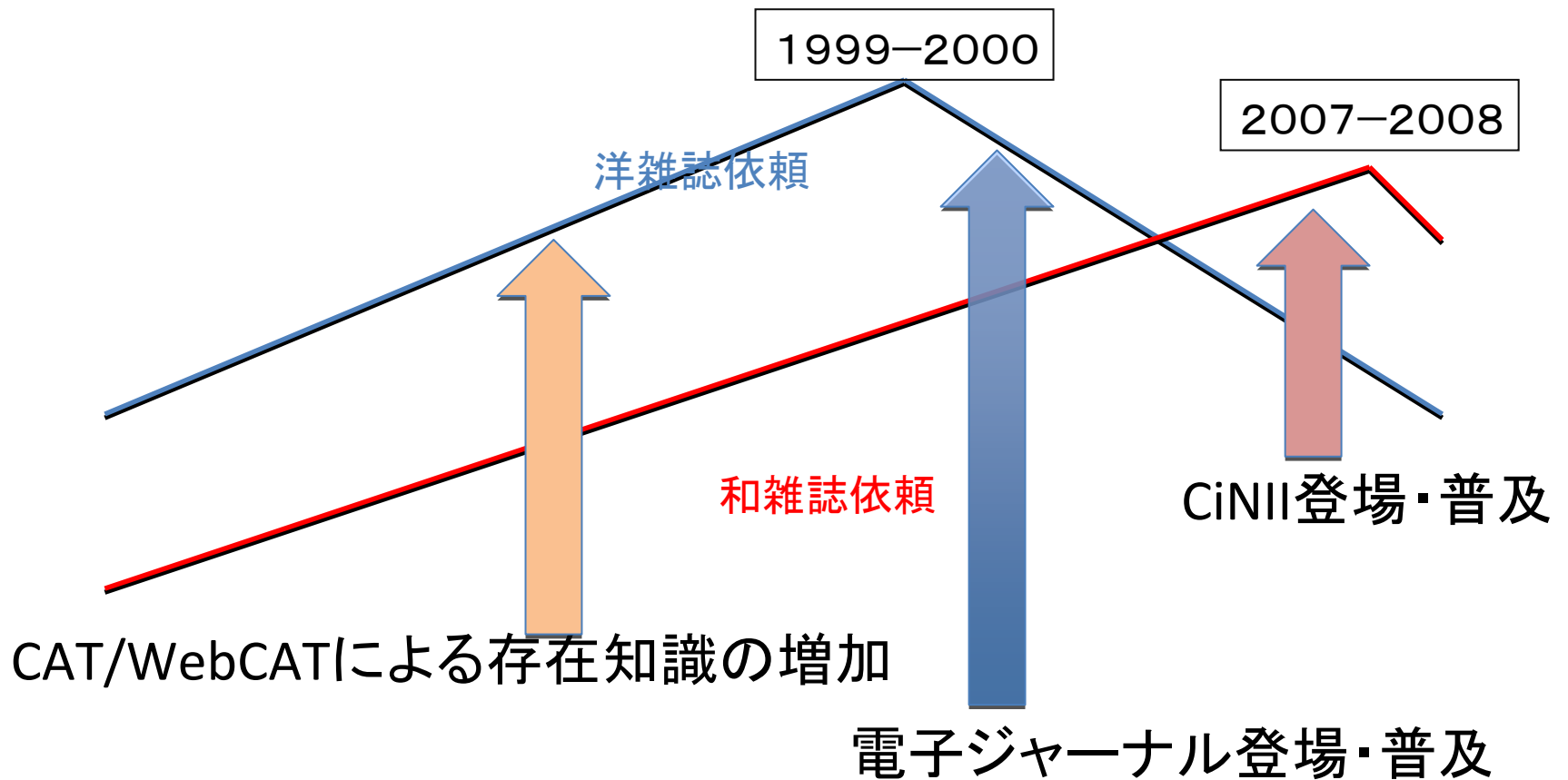


Figure 8. Change in Number of Filled Requests to Top 10 Titles in "Medical Online," from the Institutions with or without License Contract.

Note: Further investigation would be required to clarify the reason why the requests from the non-contracted institutions declined in 2007.

# ILLの動き



# 大学図書館間協力と資源共有

- 戦後の大学図書館政策
  - 戦後復興における科学技術知識の摂取（明治ではないけれど）⇒ どうやるか、だれがやるか
  - 集中方式ではなく、分散・分担方式
  - 文部省への一定の集中
  - 外国雑誌センター館
  - 80年答申
  - NACSIS/NII、CAT/ILL ⇒ ほぼ理想的な「大学図書館間協力と資源共有」⇒ あとは惰性
- 電子化の到来 ⇒ 迷走の開始
  - 「電子図書館」構想（1995年以降）
  - 「電子ジャーナル」の到来
- 情報資源共有のパラダイム変換というかパラダイム崩壊
  - 情報はすでに共有されていた

# そもそも図書館間協力？

- 総合目録の共同構築という幻想
  - － 一部図書館がもっぱら書誌入力
  - － ほとんどの図書館が書誌を流用。流用しないと重複書誌が発生
  - － 調整の必要
  - － 独自規格の限界(JPMARC, NACSIS, MARC21, OCLC,,,) )
- ILLだって、「知り合い」コミュニティの集合体
  - － やり取り関係の分析
  - － 攪乱要因は値段のみ？
- ILLなきCATに存在意義はあるのか？

# 電子的学術情報利用形態が見えてきた

- 21世紀最初の10年間の模索
  - 電子ジャーナル「プライシング」
  - 「利用＝ダウンロード」イデオロギーの普及
  - 電子資源の「管理」？
  - 「コンソーシアム」？「購買組合」？「思想団体」？
- コストが発生しない営為はない
  - 強欲資本主義的出版社だけが悪い訳ではない
  - 資源そのものはインターネット上にあればよい
- 資源の所在から直接入手可能な時に仲介者は必要？
  - 不要なら図書館も不要
  - サービスは買える

# 学術情報流通の動向と研究支援機能の将来

1. 外国出版社刊行雑誌掲載論文へのアクセス環境は電子ジャーナル化により格段に改善 ⇨ NACSIS-ILLの分析
2. 国内学会刊行雑誌掲載へのアクセス環境は電子化により改善の途上 ⇨ NACSIS-ILLの分析
3. (周知の事実として)現物貸借は需要の10%
4. NACSIS-CAT/ILLによる資源共有は、対等共同の図書館間協力に非ず ⇨ NACSIS-CATの分析
5. 外国図書の図書館による購入は減っている ⇨ NACSIS-CATの分析
6. 国内には有力な国際雑誌刊行主体は存在しない
7. 外国出版者における図書の電子ブック化は進展しつつある
8. 国内出版者による電子的情報提供はかなり絶望的である
  - 所詮、CiNii(画像)、メディカルオンライン(ほとんど画像)、次期J-STAGE
9. NDL電子化事業⇒出版社による電子出版化の波及効果は学術に及ばない?

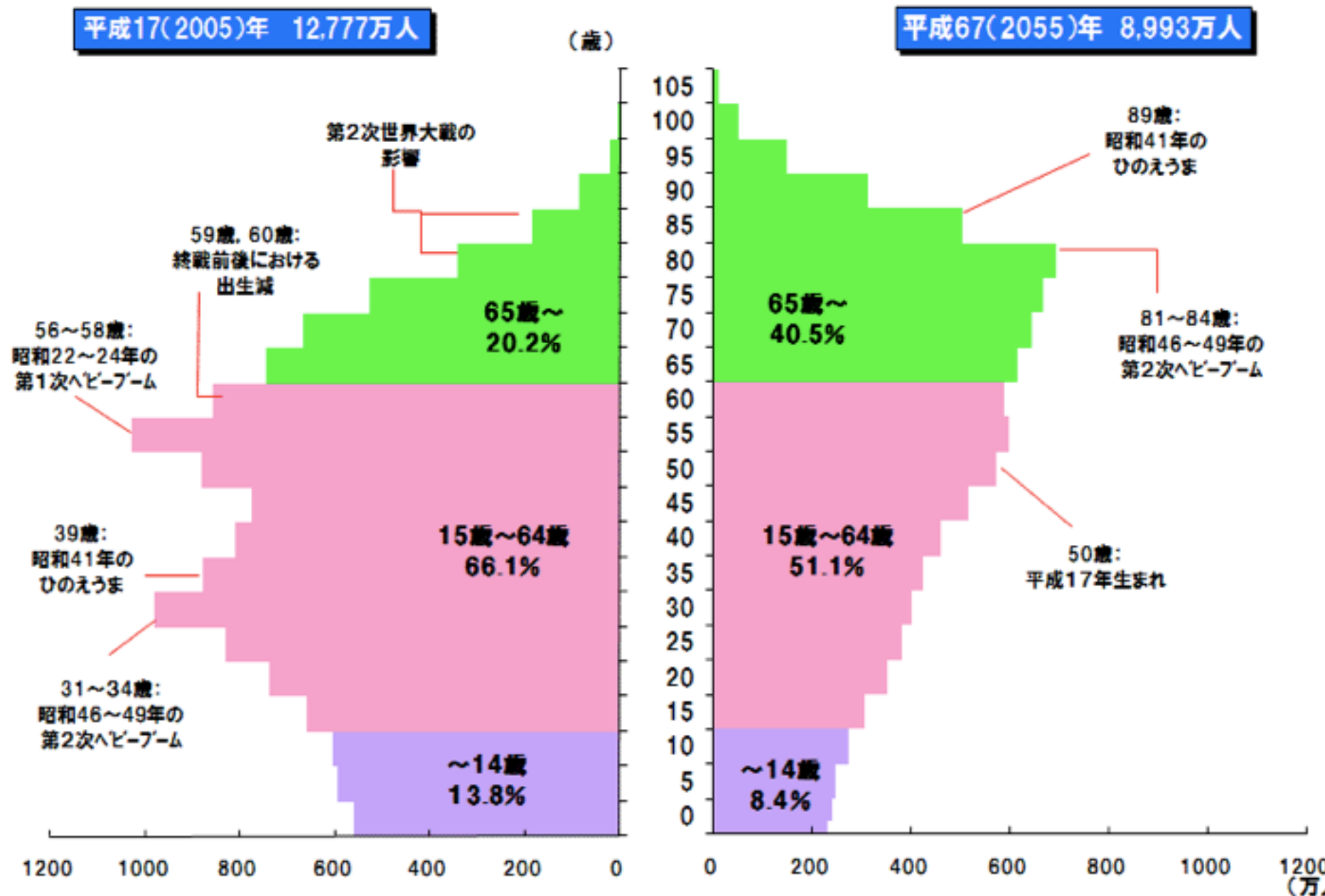
# インターネット環境普遍化・大学理念明確化 と教育支援機能

- インターネットが今後当面の社会インフラになることはほぼ確実
  - 生活のほぼすべてにおいて「形式的」コミュニケーション(電子商取引・政府・物流・金融等)は電子化⇒電子教育においてをや ⇐ 周知の事実
  - 真の意味の「ユビキタス」の実現 ⇒ どこでも学習、どこでも消費、どこでも生産 ⇐ m-libraryの調査
- 高等教育の目的と理念の変容 ⇐ 所与の制約
  - グローバルな知識基盤社会における21世紀型市民の育成⇒よくわからないけどこれが課題
  - つまり、「鎖国」指向はだめ、(悪く言えば)知識の消費財化を利することができる社会の中堅の要請(エリートを終焉)ということ？
- ネットワーク世代学生への教育のあり方
  - Gen Z の生態 ⇐ ユーザ実態調査のメタ分析(REFORM)
  - 対面教育の限界と必要性、遠隔教育の可能性と限界

# 教育はどう変わるのか

- 少子化の影響はどう出るのか
  - 今の8歳人口は、はるかに100万人以下
- 国際化
  - 教育の英語化とアジア人留学生の増加
  - 経営問題
  - 「質保証」問題
- 入学者選抜
  - すでに「入試」は学力保証としてあまり機能していない
    - 半分以上が、学力試験なしで入学
    - 高大接続
  - 質保証
- 職業訓練
  - 昨今の「就業力」ブーム

人口120年の変化はこちら ([1930~2050年人口ピラミッドの転換過程](#)) をご覧下さい。



# 要するに

- 主要な学術情報流通の電子化の趨勢は行くところまで行く
- 教科書などの日本語図書(一般図書)の印刷出版は続くかもしれないが、国会図書館には電子媒体資料が存在
- したがって、(この一部を除いて)大学図書館の一次資料提供機能は不要となる(ナビゲーションはツールを買えばよい) ⇒ 80年答申構想の終焉
  - それでも残る自館未所蔵所蔵資料の相互便宜供与は、外部業者とか、OPAC連携検索とか
- あとは、機関リポジトリによる研究(eScience)支援しかない⇒しかし、それは「図書館」？誰が図書館員をやるの？
- そもそも、知識評価の形態が変わる：ストック⇒フロー

# (日本の)大学改革は大学図書館から！

- 今の日本の大学の教育実践はこの期待に応え得るのか？
  - 然り。しかるべきFDとしかるべき施設設備があれば大丈夫
  - 否。所詮、日本の大学だ
- 応えられるのは大学図書館だけ！
  - インターネット社会は、実は、(図書館だけでなく)(理念的には)大学だって不要にするはず
  - 知識基盤社会は、知識が「買える」社会
  - 実際必要なのは、問題解決能力と、その前提となる買った知識を情報収集・分析能力 ⇒ これは、基本的には専門的知識の話ではないし、「知識として提供できる」ものではない ⇒ Apprenticeship
  - したがって、共同居住(本来の意味の(Meister付き)workshop)は効果的 ⇒ 場としての(大学機能を包含する)図書館！

# 大学図書館が自覚すべき将来(1)

1. まず身近から考えて、OPAC/NACISIS-CAT/Webcat はどうなるの
  - (a)もちろん、なくなる (目録は、所詮持っているものの inventory
  - (b)機能的代替はどうやるのか? ⇒ 上流における目録作成 (取次、OCLC)、ローカライズされたインターフェイス ⇒ 自館 ILS の限界 ⇒ しかし、機能的代替って?
2. (一部を除いて)大学図書館の一次資料提供機能は不要となる(ナビゲーションはツールを買えばよい)
  - ⇒ 80年答申構想の終焉 ⇒ それでも残る自館未所蔵所蔵資料の相互便宜供与は、外部業者とか、機関リポジトリによる研究 (eScience) 支援しかない ⇒ しかし、それは「図書館」?誰が図書館員をやるの?いずれにせよ ILL は消える
3. 機関リポジトはどうなるのか?
  - (a)なくなる。しかし、PDF リポジトリにとどまるなら科学の一部とはもはやいえない ⇒ 研究プラットフォーム化 (ただし、商業出版社という強敵も参入)
  - (b)(さまざまな意味での) 評価への関与

# 大学図書館が自覚すべき将来(2)

4. 情報リテラシー教育・利用者講習はどうなるのか?
  - (a)不要になるか、ちゃんとした「授業」になる (図書館員の教員化)
  - (b)「講習」が必要なインターフェイスは、もはやインターフェイスたり得ず
5. ラーニング・コモンズはどうなるのか?
  - (a)不要になる、というか、コンピュータ・クラスターはやめるほうが安全。利用者認証をいれた無線LAN が一般的になるだろう。
  - (b)問題は、そこがたんなる自習室でないということはどう実現するか ⇒ 図書館の教室化 ⇒ 「図書館でオフィス・アワーを」
6. 雑誌契約はどうなるのか?
  - (a)学術情報流通におけるウェブ技術活用が進展するにともなって、ページ付電子雑誌論文は、一種のメタデータ、最低のメモ、研究の残り滓と化す
  - (b)多くの PDF はオープンアクセス (ないし、) になって、研究者は自分の環境を自分で買うようになり、その「ジャーナル環境」含まれるだろう ⇒ 雑誌の消滅
7. 図書購入はどうなるのか?
  - (a)eBook の導入は進むであろうが、どうなるかわからない ⇒ さまざまな形態
    - i. サイトライセンス ⇒ ウェブ技術活用教科書・教材
    - ii. サイトライセンス +POD ⇒ 伝統的教科書
    - iii. サイトライセンス (パッケージ?貸出モデル?) ⇒ 学術モノグラフ
    - iv. 物品購入 + 保存・利用 ⇒ 学術研究資料 (?)
  - (b)いずれにせよ、コンテンツ資源は外部にあり、ウェブ経由で導入するという形態へ移行 ⇒ 利用者(構成員? 受講者?) 認証で利用